

エスニックコミュニティへの“再”適応

—成人期にある移民 1.5 世に注目して—

日本学術振興会 平澤文美

1. 目的と背景

本報告では、成人期にあるベトナム出身の 1.5 世に注目し、彼らが幼少時に来日し教育期間の大半を日本社会で過ごし、日本社会への適応を経たあと、職業を通じてエスニックコミュニティへ“再”適応していく過程について、聞き取り調査をもとに検討する。

幼少時に移住を経験した 1.5 世や、移住した地で生まれた 2 世の社会適応に関する社会学的研究は、移住先であるホスト社会への社会統合という文脈から論じられる傾向にある。日本においては、主に学齢期にある移民を対象に、学校への適応、学業達成という観点から議論されてきた。しかし、移住自体が地理的に一方向的なものではなく、当該社会への包摂も単線的に同化に向かうものではない昨今の状況においては、移民の社会適応も対ホスト社会以外の局面を想定する必要がある、ライフコースがより多様化してくる成人期への注目も必要である。改めて適応を求められる局面には、出身地の社会への適応、また本報告で取り上げるように、移住先社会で出身を同じくするコミュニティの様々な成員と新たに紐帯を形成しながら適応していく局面などがあり得るだろう。異質さの感覚や軋轢はただホスト社会に編入する際にのみ生じるのではなく、改めて出身を同じくするコミュニティと関わろうとする時にも立ち上って来る事柄であると考えられる。

2. 方法

1970 年代後半以降、インドシナ難民として日本に定住したか、家族呼び寄せ等で来日したベトナム出身の 1.5 世（幼少時に来日し、日本定住にあたって中途からでも初等教育を経験した人）を対象に、来日時から現職に至るまでの経験について遡及的な聞き取り調査を実施した（2012 年～2013 年）。本報告では、その中で成人期に職業を通じて改めてエスニックコミュニティの成員たちと密接なかかわりを持つようになった事例について取り上げ、“再”適応の過程—接触の契機、生じる軋轢や葛藤、対処の方法—について検討する。

3. 結果・結論

職業生活においてコミュニティと密接なかかわりを持つようになった 1.5 世代は、自らが培ってきた知識や技術を発揮して自己実現を果たし、自負と有能感も持っている。しかし一枚岩ではなく多様な対立軸を含むコミュニティでは、複雑な社会関係や権力配分の構造に対応をしなければならず、言語能力など技術はあっても文化的コードには慣れていない 1.5 世たちは時に葛藤を抱える。密接に関わっていても安住よりは、マージナリティが際立つように見える。

移住先の社会で主流との間で生じる軋轢は、それへの反発と防御としてエスニックな紐帯や対抗するアイデンティティを発達させるとされてきた。これとは逆に出自を同じくする人々やコミュニティの中で生じる失望や軋轢に対処し、心理的な均衡をとるいくつかの方法の中で注目されたのは、職業倫理を発達させることであった。日本社会での経験を通じて培われたものではあるが、全面的にナショナルな要素には還元できない普遍性を持つ価値観への依拠は、コミュニティに属しつつ対抗する方策を模索する中発達させた、1.5 世のリジリエンスであると理解した。